

川原製作所／富山県

原材料を自分で育て、紙を漉くから面白い

山を開墾し、木を育てるところから始まる和紙作り。

新たな「伝統」を生み出し、伝えようと挑んでいる若き和紙職人の熱い思いとは——。

取材・文／岸田直子 撮影／原田圭介



水中に楮の繊維とトロロアオイの根から出る粘液を入れて、紙を漉いていく。

和紙作りの工程

葉を落とした楮の刈り取り作業。愛息・太郎（たろう）くんもお手伝い。



工房内。右奥の釜で楮を蒸して皮をはぎ、重曹で柔らかく煮る。その後、左手前の水槽で水洗いする。



水を絞って木槌でたたき、繊維を崩していく。



再び水でほぐした繊維。これを水をはった水槽に入れ、トロロアオイを加えて、紙に漉いていく。

和紙と相性のいい
版画も大好きな創作



社訓を木版に彫るほど、版画が好き。タイではなく富山のブリを持っている「越中えびす」など創意工夫に富んでいる。

弟子入りしたとき、師匠の米丘さんは83歳。高齢のため、紙を漉く作業は2、3枚しか見せてもらえなかったそうです。

「弟子は師匠の背中を見て学ぶといいますが、僕は自分の後ろに立つ師匠から『口伝』で和紙作りを教わりました」

米丘さんが亡くなったあと、川原さんは作業場を蛭谷から虫谷へ移し、一人で山を開墾して楮を、畑で粘料のトロロアオイを育て始めました。

「4月から11月は山や畑で農作業をし、12月から紙漉きをする半農半工の暮らしです。自分が泥にまみれながら手塩にかけて育てた木から紙を作るんですから、その思いはひとしおです」

伝統工芸品のコンクールで数多くの賞に輝く川原さんの和紙は、基本的に受注生産です。なぜなら、その人が求める和紙を作りたいから。富山県民会館ロビーの内装に使う和紙を依頼されたときは、立山杉の皮を楮に混ぜ、地域の特色を出しました。

「蛭谷和紙だからほかの和紙とは違うとか、僕が作った和紙を買ってください、ではなく、あなたに合った和紙はこれですよ、というものを提供したいんです」

師匠から口伝で教わった製法と紙漉き技術

今生まれたものを100年先まで伝えたい

富山県・立山町。かつて瓦焼き工場だった跡地の山を開墾し、和紙の材料となる楮を育てるところから、和紙作りに取り組んでいる若き職人がいます。約400年の歴史を持つ、国の伝統工芸品「蛭谷和紙」の後継者、川原製作所の川原隆邦さんです。

高校卒業後、JFL（日本フットボールリーグ）でサッカー選手として活躍していましたが、22歳のときにけがで断念。長く続けられる仕事を探しているとき、蛭谷和紙最後の職人・米丘寅吉さんに出会ったのがきっかけでした。

「伝統工芸に興味があったわけではないんですが、木から紙が出来あがっていく工程を目の当たりにし、なんてすごいんだろうと感動しました。そして、それを受け継ぐ人間がいらないのなら、自分がやってみよう、と思ったんです」

蛭谷和紙の特徴は、1000年以上保存できる耐久性、強靱かつ柔らかな紙質に加え、原材料を育てるところから行うことです。

「楮を自分で育てている和紙職人は日本に10人くらいしかいないそうです。ほとんどは輸入品に頼っている。でも、原材料から育てることはもの作りの基本だから、僕は一番大事にしたい」

Profile

川原隆邦さん

1981年、富山県生まれ。親の仕事の関係で各地を転々とし、高校卒業後、両親と富山県に戻る。日本フットボールリーグで活躍後、2003年、蛭谷和紙職人・米丘寅吉氏に師事。2004年、川原製作所を立ち上げる。2012年に結婚、2015年、虫谷に作業場を移す。
所在地／富山県中新川郡立山町虫谷29
<http://www.birudan.net/>

「その昔、和紙は暮らしの中に普通にあるものでした。でも、今は和室もない家が多い。その中で和紙が生き残っていくには、暮らしに合ったものにならないと」

昔ながらの製法と道具で和紙を作るといふ本質を守りながらも、和紙でランブシェードを作るなど、絶えず新たなことに挑戦していきたい、と川原さんは語ります。

「100年残ったものでも、消えるときは1日です。戦中、戦後を生き抜いた師匠はそれを知っていました。時代に応じて変化する柔軟性を、僕は技術以上に師匠から教わった。大切なのは、今生まれたものが100年残るか、です」

歴史を守るのではなく、生み出していく——川原さんの挑戦はこれからも続きます。